

戦争／占領体験の思想化  
——戦後沖縄をてがかりに——  
秋山 道宏（明治学院大学）

戦後70年以上が経過するなか、戦争体験の継承の重要性はさまざまなかたちで議論されてきた。また、戦後史研究が進展したことで、近年、戦後日本社会のあり方にとって戦争体験が切り離せないものであったことが明らかにされている（道場親信 2005、福岡良明 2009・2011 など）。その一方で、戦争体験者がゼロになる日が近づくという事実は、記憶の「風化」という次元の問題だけでなく、「戦後」という時代そのものの終焉への危機感をも喚起させているように思える。

では、そもそも「戦後」という時代において、戦争やその後の占領における体験は、人びとにおいてどのように認識され、語られ、引き継がれてきたのだろうか。本報告では、太平洋戦争末期の沖縄戦（地上戦）を体験し、その戦争と「地続き」（鳥山淳 2013）のなか、「戦後」をむかえざるを得なかった沖縄における戦争体験と占領体験の思想化の営為と、その意義を明らかにする。

そのために、ここでは、以下二つのアプローチから上記の課題に取り組んでみたい。第一のアプローチは、沖縄戦への認識とその変化を時系列的に明らかにするものである。「反戦・平和の島＝沖縄」というイメージは、戦後一貫したものではなく、軍事・軍隊中心の戦争体験の語りや、日本復帰の必要性を強調するために沖縄戦を「祖国防衛戦争」としてナショナルリズム的に捉えるような動きもまた存在してきた。まず、本報告では、沖縄において戦争体験がいかに認識されてきたのか、という見取り図を描くため、新聞資料の時系列的な検討を行う。

1960年代に入り、戦争体験の捉え方において、軍事・軍隊中心の視点が批判され、住民の視点から「聞き書き」（鳥山 2006）を進め、継承していくという作業が進められた。第二のアプローチでは、このような変化が、米国占領のなかでどのように展開されたのかに着目する。米軍基地という存在は、他国への軍事攻撃や地域での事件・事故を通して、否が応でも戦争と結びつけられていることを意識させ、沖縄戦での戦争体験を呼び起こすものでもあった。これら占領体験が、戦争体験の捉え方や認識にどのような影響を与え、また、継承活動への転換を迫ったのかについて検討する。具体的に検討の対象とするのは、戦争体験の「聞き書き」の嚆矢となった『沖縄県史』（1971年）発刊までのプロセスと、同時代的な戦争体験の想起のあり様である。いまだに「米国占領のなかで戦争体験がいかに想起されたのか」についての検証は、体系的に行われていないが、その想起と密接に関わったと考えられる米軍機事故への認識を通して、この課題について考えてみたい。

以上の二つの作業を通して、非体験者を含めた「共同作業」（屋嘉比収 2009）として取り組まれてきた戦後沖縄における戦争／占領体験の思想化という営為の内実と、その意義について明らかにしてみたい。